

国語

(古文・漢文を除く)

2022年10月15日実施

100点満点

医療福祉専門学校

緑生館

2023年度

- 総合看護学科
推薦2期・一般2期入学試験問題
- 理学療法学科・作業療法学科
一般2期入学試験問題

[注意事項]

- 1 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 この冊子は26ページあります。問題は第1問～第2問まであります。
- 3 ページの脱落や印刷不鮮明な個所を見つけた場合には、すみやかに申し出て下さい。
- 4 解答用紙の受験番号欄等の記入に当たっては、受験票に記入した内容と同一になるように注意して下さい。提出する前にもう一度間違いがないかどうか確認して下さい。
- 5 解答は必ず指定された解答記入欄にはみ出したり、薄かったりしないようにマークして下さい。たとえば、問題の文中または文末等に **35** の表示のある問いに対する解答は、下の(例)のように解答番号 35 の解答記入欄に正確にマークして下さい。
その際、解答用紙を汚したり曲げたりしないようにして下さい。

(例)	解答番号	解 答 記 入 欄				
	35	1	2	3	4	5
		☐	☒	☐	☐	☐

(悪い例)

1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	塗り残し
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	はみ出し
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	消し残し

- 6 解答用紙は鉛筆でマークした部分を機械で直接読み取りますから、[注意事項] を正しく守って下さい。とくに、訂正する場合には消しゴムでいいねいに消し、消しくずはきれいに取り除いて下さい。

受験番号		氏名	

第1問 次の文章を読んで、後の設問（問1～7）に答えなさい。

群馬県の上野村で山の畑を耕すようになって数年が過ぎると、私は自分の釣りが少し変わったような気がした。魚を追いかけるという感覚よりも、釣れるときを待つ、という感覚のほうが、いつの間にか強くなっている。釣りとは、釣れるときを待つことである。

そんな気持ちをもちながら山里の世界をみると、ここには「ときを待つ文化」とでもいうべきものが、あるような気がした。冬が終わる頃になると、自然も村人も、春が戻ってくるのを待つように感じられる。そして、そのときがついに現れ、自然はいつせいに春の営みをはじめ。草木が芽生え、花をつけ、動物も虫たちも、ある日突然わきだしたように春の陽ざしの下にとびだしてくる。そして村人が畑に姿を現し、村人の春の営みが始まる。

ここには、そのときが現れなければ何もはじまらず、そのときを待つことによって成り立つ営みの文化が息づいている。

村の暮らしでは、すべての面で「ときを誤つ」てはいけないのである。畑仕事でも山仕事でも、そのときを待ち、そのときを誤らないようにこなすのが基本になっている。それは季節に関することだけでは無い。村人は、子供が大人になるときを待っている。成長を促すという働きかけよりも、大人になるときを待つという感覚のほうが強い。だから、子供に何かを教えるときでも、そろそろ教えておこうかなと思いつながら、教えるときがくるのを待っている。

考えてみると都会の暮らしでは、そのときがくるのを待つこと自体が、少なくなってきた。すべてのものを、人間が効率よく

使えるように変えていくのが「近代的人間」の生き方であり、近代社会の尺度からみれば「待つ文化」などというものは、遅れた人々のものとみなされてきた。

もちろん都会でも、待ち合わせの時間を待つというようなことは、おこなわれるのである。だがここにおける時間を待つというときの時間と、山里の自然や村人が、「とき」を待つというときの「とき」は、同じものなのだろうか。私には同じもののように思えない。

待ち合わせの時間なら、人間たちは勝手に時間を変更することもできるだろう。それにこの時間は、たとえばあと一時間というように、時計によって秩序化された時間である。ところが山里の人々が待っている「とき」は、その「とき」を必要とする関係が待ち望んでいる。春の畑仕事をはじめの自然と人間との関係が、その「とき」を待つてはじめられるのである。この「とき」は、予想よりも早くふいに現れるかもしれないし、まだ何日も待たなければならぬのかもしれない。

関係によって求められている「とき」は、勝手につくりだすことはできないし、時計の時間でもない。その「とき」を必要とするものたちとともにある「とき」である。だから、人々も自然も、その「とき」がくるのを待つ。ここに、待つことからはじまる営みの文化が生まれる。

私たちはこれまで、時間とは何かを考えずに暮らしてきたような気がする。あるいは、時間とは、時計が刻みつづけるものだと思いきんできた。それは現代社会が、時計の時間を基準にして成立しているからであろう。

だが、時間とは、もつと自由なものではなからうか。人間は時間のなかに存在している。人間たちの日々の営みのなかに、時間もまた存在している。とすれば、人間たちが時間とどんな関係をとり結ぶのかによって、時間の性格もまた変わっていくのではなからうか。

実際私たちは、時間にはしばしば不思議なことがおきるのを知っているのである。長い時間が一瞬のうちに過ぎ去ったり、逆にわずかな時間を過ごすために、あきあきするほどの「長い時間」が必要だったり。時計のうえでは長い時間が経過したのに何も残らない時間があつたり、ほんのわずかな時間が自分を変えてしまうほどの大きさをもっていたり。

私は、一度時間を既成観念から解放しなければならぬと思う。時間の自由さを回復してみたいと思う。人間にとって自由とは何かを考えるのなら、人間とともにある時間そのものを、もつと多様で、もつと自由なものにしなければならないのである。

群馬県の上野村で、ある日何人かの村人と茶飲み話をしていると、一人が「俺の親父は偉かった」と言い出した。面白いのはその理由だった。

彼の家は村の東のはずれにある。逆に、この村で私が常宿にしている鉱泉宿は、西のはずれにあつて、この二軒の家は、歩けば半日の距離ほど離れている。彼の父親は、かつてその距離を歩いて、ときどき鉱泉旅館へと湯治にでかけたのだという。

何日か鉱泉宿に泊まり、父親は帰宅の途につく。ところがその帰路の旅には、一週間ほどかかるのが普通だった。何てことはない。帰り道、先々の家に上がりこんでは泊まってしまうから、なかなか家には着かないのである。まだ家々には電話はなかったけれど、村の情報網は素速いものがあつて、鉱泉宿を出たという話はじきに伝わってきた。そうすると、家の人々は、それでは一週間もたてば帰ってくるだろうと思つていた。

「それができる親父は本当に偉かった」と、いまでは自分も高齢にさしかかつている息子は言つた。どこの家に寄つても歓迎される親父だった。誰もが誘ってくれる親父だった。半日の距離に一週間かける人生を、許すことのできる親父だった。

この話を聞いていた村人は、誰もがそうだという顔をしていた。そして私にも、彼の父親が、とても偉い人のように感じられてくるのだった。

もしかすると、そんな人はかつては、たくさんいたのかもしれない。しかし、それができなくなった今日になると、彼の父親は、根源的な自由をもっていた人のようにも思えてくる。彼の父親は、時間を創作する自由をもっていたのである。だから、彼の父親の行く先々で、村の時間が生まれた。

今日の私たちの時間は、同じ速度で、直線的に過ぎ去りつづけている。過ぎ去る時間に追いかけられ、時計の針を気にしながら、毎日を過ごしている。時間は絶対的な権力であるかのように、私たちを支配する。

しかし彼の父親がつくりだしていく村の時間は、そういうものではなかった。彼の父親が登場したとき、その時間がつくられは

じめるのである。

おそらく村人は彼の父親の姿をみかけると、気軽に声をかけ、家へと誘ったのであろう。そうすれば、結局泊めることになるのは承知のうえだ。そして村人は、彼の父親がいることによって生まれる時間を、みんな楽しんでのたうちまわろう。

この時間は、時計が刻んでいく近代的な時間とは異なる。時計の時間は、いつも一方的に過ぎ去っていくけれど、この村人の時間は、そこにいる者たちの手で、つくられつづけていくのである。それに、おそらくこの村人の時間は、等速で刻みつづけられるものでもなかっただろう。ちょうど農業とともにある時間がそうであるように、時間はときに凝縮されて気ぜわしく動き、ときに呆けたように、ゆっくりとした歩みをみせたことだろう。

おそらく彼の父親は、村人の労働の時間のなかに、いつとぎの間をつくりだしていたのである。彼の父親が現れることによってしか生まれない時間がつくられ、その時間は、労働の時間のなかでは、いつとぎの間である。

私たちは、自由の権利や自由の義務と結びついた近代的な自由だけを、自由だと考えがちである。しかし私には、それだけが自由だとは思えない。時間を自由につくりだしたり、時間の歩みを変えていたりする自由も、人間にとっては根源的な自由のひとつだと思うのである。

ところで、彼の父親がもっていたような時間の自由、それは彼の父親が考えたものではなかった。おそらく、その時間を成立させたものは、村の生活そのものであり、彼の父親がつくりだしてきた村人とのそれまでの関係だったのであろう。村人の日々の労働との関係のなかに、彼の父親が現れ、村人はふとその働く手をとめて、彼の父親との関係のなかに入っていく。そんな関係の世界が、ここにはあつたはずである。その関係のなかに、時間は生まれていった。

とすると、うらやましく思うものは、彼の父親がつくりつづける時間というより、そんな自由な時間の創作を可能にした、彼の父親とともにあつたさまざまな村の関係のほうなのかもしれないのである。

いまでも、飛行機にはあまり乗りたくないと思っている。特に長距離になると、時間軸が強制的に変更されるような感じがして、自分の時間世界がメチャクチャにされたような気がしてくる。しかも飛行中は、ひたすら飛行時間が終わるのを待つだけで、そこ

に旅の時間がないのも面白くない。

それにしても、いつから旅行中の移動というものは、こんなつまらないものになってしまったのだろうと思うことがある。以前は、移動そのもののなかに「旅」があつたはずである。それが、いつの間にか目的地への「移動」になった。そして、移動にかかる時間が、わずらわしく感じられるようになつてきた。そこで、私たちは、旅のなかでもいかに速く着くかなど上手に時間を管理するようになった。そのとき、旅の楽しさも薄れていったはずなのに。

現代人は、適切な時間管理ができていくかどうかを、すぐれた生き方の基準にしているような気がする。時間の管理という発想は、二十世紀初期の工場改革のなかから生まれたものに違いないが、それは時間が商品をつくりだしていく工場のかたちを、創造するための発想だつた。労働者の腕や術がものをつくりだす時代から、時間管理のもとで決められた作業をすれば商品がつくられていく時代への転換が、この発想をもとにしてすすめられたのである。この変更がうまくいったところでは、工場の主役は管理された時間に移り、労働はその道具になつた。

ちょうど「旅」が「移動」に変わったように、このとき労働もまた標準作業にと変わったのである。^③

同じようなことを、現代社会はあらゆる部面で、おこなつてきた。こうして、時間を上手に管理することが目的になり、時間の流れを超越したような創造の楽しさは、少しずつ失われていった。^④

そんなふうに考えていくと、現代人たちは、自分の一生でさえ、時間管理の発想でとらえるようになってきた気さえるのである。学生時代の時間を無駄なく管理し、定年までの時間を上手に管理し、そのことによつて老後の時間を破綻しないように管理する。それがかしこい人生だともいうように。こうして、私たちは、永遠につづく時間の自己管理計画をつくり、その計画に追われるようになった。

そして、ふと気がつく、私たちは、管理する必要のない時間が現れてくることに、恐怖さえしているのである。多くの者が死を恐れるのは、死が時間の管理の消滅へと私たちを導くように、思われるからなのかもしれない。もしかすると、現代人たちは、主体的であるということを、しっかりとした時間の自己管理をおこなうことだとなんとなく理解していて、時間の自己管理が必要で

はなくなること、主体の消滅を感じとっているのかもしれないのである。とすれば管理する時間の喪失は、現代人にとっての「死」である。

部分的には同じようなことを、私たちは老後という言葉にも感じとっている。「老後」はすでに高齢化した者にとつては、そこに自分の存在があるのであつて、別に不安なものではないのだけれど、これから「老後」を迎えようとする者には、この言葉はたえず重圧を与える。それもまた「老後」が、時間を管理する必要のなくなったときを迎える喪失感を、私たちに予想させるからであらう。

だから私たちは、若いときも、齡をとつてからも、たえず適切に自分の時間を自己管理しようとしつづける。そして、「移動」の時間管理をしているうちに旅の楽しさが薄れ、時間に主導された生産によつて労働が虚しいものになつていったように、人生という旅の楽しさも、人生という労働の楽しさも、減らしつづけているのかもしれない。

時間論の視点からみれば、近代的市民とは、自分の人生の時間を、上手に自己経営しようとする人々である。将来の自己の時間が破綻しないように、つねに準備し、その準備を計画どおりに推進するために、現在の時間を自己管理する。こうして自分の努力だけで、自己の時間を経営しつづけることによつて、孤立した時間のなかに存在しつづけるのが、近代的個人である。

いま私たちは、こんな時間世界のなかで生きること、人間の自由はあるのだろうか、ふと迷いはじめたのである。

問1 傍線部(ア)と(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

1

5

(ア) 効率

1

① 都市のコウガイ
③ 計画のヨウコウ

② 手口がコウミョウだ
④ 犯罪のジコウ

(イ) 歓迎

2

① 野球のカンシュウ
③ シンカンとした空気

② 人生のアイカン
④ 会社のテイカン

(ウ) 凝縮

3

① 先生にシシユクする
③ 辞書のシユクサツ版

② ゲンシユクな式典
④ 前世からのシユクエン

(エ) 無駄

4

① ダベンを弄する
③ タイダな生活

② 漁船をダホする
④ 車がダコウする

(オ) 喪失

5

① 株価をソウサする
③ ソウボウたる大海原

② モチウの期間
④ 着物のモスソ

問2 二重傍線部②③の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

6

8

④ 時間の流れを超越したような創造の楽しさ

6

① 古来の伝統的なものの持つ美しさを再現する楽しさ

② 絶えることなく、次々と新しいものを作り続けていく楽しさ

③ 時間には捉われず、腕と技術などを十分に発揮してものを産み出す楽しさ

④ 古いものの持つ美点を生かしながら、より新しいものを創り出す楽しさ

⑤ 同じようなこと

7

① 自分で管理する時間の喪失が、主体の消滅につながることに

② 時間を管理する事ばかりに捉われて、本来の自分を無くしてしまうことに

③ 自分で管理する時間が多くなればなるほど、人生の楽しさが無くなることに

④ 適切な時間管理ができていくかどうかがすぐれた生き方の基準になることに

⑤ 孤立した時間

8

① 自分さえよければ、他がどうであろうとかまわない時間

② 社会の動向に背を向け、自分の信念を貫きとおす時間

③ 社会から遮断され、自分だけを拠り所として生きる時間

④ 他とは関わりなく自己管理された時間

問3 傍線部①「時間とは、もっと自由なものではなからうか」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選

んで、番号で答えよ。

解答番号は

9

- ① 私たちは、自然との関わりの中で、時の推移に応じて、当然為すべきことを求められること
- ② 私たちが、自分の意志によって時間を管理し、物事を効率よく成し遂げること
- ③ 私たちの日常は、それぞれ固有であるものの、時間はすべての人々にとって平等に過ぎていくこと
- ④ 私たちは、時間に支配されているが、時間の用い方次第で、意味のあるものになったり、無意味なものになったりする
こと

問4 傍線部②「面白いのはその理由だった」とあるが、この部分の「理由」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選

んで、番号で答えよ。

解答番号は

10

- ① 彼の父親は村人との人間関係が緊密で、どんな時でも自分の思い通りに自由自在に振舞えたから
- ② 彼の父親が作り上げてきた山里や村人たちとの関係の中で、彼の父親にしかできない時間を産み出していたから
- ③ 彼の父親は山里で自分独自の時間の使い方をしており、それが周りの人たちの常識からかけ離れたものだったから
- ④ 彼の父親は隣人との強い信頼関係で結ばれており、その絆はどんな時でも絶えることはなかったから

問5 傍線部③「労働もまた標準作業にと変わったのである」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次の中から一

つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

11

① 時間を管理するという発想により、自然の推移の中でおのづから物が生み出される形態から、労働が効率的になり、高水準で高品質なものが大量に生産されるように変化したこと

② 時を待つという発想により、労働が必要と供給を考慮して計画的に商品を創り出す形態から、自然の推移と調和して、適切な時宜を大切にして、物を創り出すものに変化したこと

③ 時を待つという発想により、時間を管理することによって物を創り出すという生産形態から人の知恵や技術によって商品を作り出すものに変化したこと

④ 時間を管理するという発想により、労働が労働者の手腕や技術により物を創り出すものから、決められた作業により商品を作るものに変化したこと

問6 筆者の考える「現代人の時間の捉え方」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

12

① 現代人は、如何にうまく時間を管理するかを生き方の基準として、自分の一生でさえも、自分の努力で、適切に自己管理すべきだとする考え方

② 現代人は、時間と自然とを融合させ、それに適応することを生き方に基準として、自然との関わりで生ずると気を大切にすべきであるという考え方

③ 現代人は、うまく時間を管理しながら、一方で如何に自然と調和するかを生き方の基準として、自然の移り変わりの時間に適応していくべきだという考え方

④ 現代人は、如何に効率よく時間を使うかを生き方の基準として、少しでも無駄をなくし、待つことを良しとせず、将来までつねに準備して計画どおりに進めようとする考え方

問7

本文の内容と一致するものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

13

① 「老後」という言葉は、時間を管理する必要がなくなることを意味しており、その時を迎えるものに安堵感を与えてくれる。

② 人間は時間のなかに存在しており、いつも時間に拘束、支配されている。

③ 上野村での生活には、山里と村人との関わりの中で、必然的に生まれてくる「とき」を待つ文化が保たれている。

④ 旅する時も、移動の時間管理をすることで、その楽しさも濃縮される。

第2問 次の文章は、小説「枯野抄」の一節、である。読んで、後の設問（問8～14）に答えなさい。

元禄七年十月十二日の午後である。ひとしきり赤々と朝焼けた空は、また昨日のように時雨れるかと、大阪商人の寝起きの眼を、遠い瓦屋根の向うに誘ったが、幸い葉をふるった柳の梢を、煙らせるほどの雨もなく、やがて曇りながらもうす明るい、もの静かな冬の昼になった。立ちならんだ町家の間を、流れるともなく流れる川の水さえ、今日はぼんやりと光沢を消して、その水に浮く葱の屑も、気のせいか青い色が冷たくない。まして岸を行く往来の人々は、丸頭巾をかぶったのも、革足袋をはいたのも、みな風の吹く世の中を忘れたように、うっそりとして歩いて行く。暖簾の色、車の行きかい、人形芝居の遠い三味線の音―すべてがうす明るい、もの静かな冬の昼を、橋の擬宝珠に置く町の埃も、動かさないくらい、ひっそりと守っている……

この時、御堂前南久太郎町、花屋仁左衛門の裏屋敷では、当時俳諧の大宗匠と仰がれた芭蕉庵松尾桃青が、四方から集まって来た門下の人々に介抱されながら、五十一歳を一期として、「埋火のあたたまりの冷むるがごとく」静かに息を引きとうとうとしていた。

芭蕉はさつき、痰咳にかすれた声で、覚束ない遺言をした後は、半ば眼を見開いたまま、昏睡の状態にはいつたらしい。うす痘痕のある顔は、顴骨ばかり露わに痩せ細って、皺に囲まれた唇にも、とうに血の気はなくなってしまった。ことに傷ましいのはその眼の色で、これはぼんやりした光を浮かべながら、まるで屋根の向うにある、際限ない寒空でも望むように、いたずらに遠い所を見やっている。「――」――ことによるとこの時、このとりとめのない視線の中には、三四日前に彼自身が、その辞世の句に詠じた通り、茫々とした枯野の暮色が、一痕の月の光もなく、夢のように漂ってでもいたのかもしれない。

「水を。」

木節はやがてこう言って、静かに後ろにいる治郎兵衛を顧みた。一碗の水と一本の羽根楊枝とは、すでにこの老僕が、用意しておいたところである。彼はその二品をおずおず主人の枕元へ押し並べると、思い出したようにまた、口を早めて、専念に称名を唱

え初めた。治郎兵衛の素朴な、山家育ちの心には、芭蕉にせよ、だれにもせよ、ひとしく彼岸に往生するのなら、ひとしくまた、弥陀^{みだ}の慈悲にすぎるべきはずだという、堅い信念が根を張っていたからであろう。

一方また木節は、「水を」と言った刹那の間、はたして自分は医師として、万方を尽くしたろうかという、いつもの疑惑に遭遇したが、すぐにまた自ら励ますような心もちになって、隣にいた其角の方をふりむきながら、無言のまま、ちよいと合図をした。芭蕉の床を囲んでいた一同の心に、いよいよという緊張した感じが咄嗟^{とつさ}に閃いたのはこの時である。が、その緊張した感じと前後して、一種の弛緩した感じが――いわば、来たるべきものがついに来たという、安心に似た心もちが、通りすぎたこともまた争われない。ただ、この安心に似た心もちは、だれもその意識の存在を肯定しようとはしなかったほど、微妙な性質のものであったからか、現にここにいる一同の中では、最も現実的な其角でさえ、折りから顔を見合わせた木節と、際どく相手の眼のうちに、同じ心もちを読み合った時は、^①流石にぎよつとせずにはいらなかったであろう。彼は慌しく視線を側へそらせると、さりげなく羽根楊枝をとりあげて、「では、お先へ」と、隣の去来に挨拶した。そうしてその羽根楊枝へ湯呑の水をひたしながら、厚い膝をにじらせて、そつと今はの師匠の顔をのぞきこんだ。実を言うと彼は、こうなるまでに、師匠と今生の別れをつげるということは、さぞ悲しいものであらうぐらいな、予測めいた考えもなかったわけではない。が、こうしていよいよ末期の水をとってみると、自分の実際の心もちとは全然その芝居めいた予測を裏切つて、いかにも冷淡に澄みわたっている。のみならず、さらに其角が意外だったことには、文字通り骨と皮ばかりに痩せ衰えた、致死期^{ちしき}の師匠の不気味な姿は、ほとんど面を背けずにはいらなかったほど、烈しい嫌悪の情を彼に起こさせた。いや、単に烈しいといったのでは、まだ十分な表現ではない。それはあたかも目に見えない毒物のように、生理的な作用さえも及ぼして来る、最も堪え難い種類の嫌悪であつた。彼はこの時、偶然な契機によって、^②醜^{みにく}き一切に対する反感を師匠の病軀の上に洩らしたのであろうか。あるいはまた「生」の享樂家たる彼にとつて、そこに象徴された「死」の事実が、この上もなく呪うべき自然の威嚇だったのであろうか。――とにかく、垂死の芭蕉の顔に、言いようのない不快を感じた其角は、ほとんどなんの悲しみもなく、その紫がかつたうすい唇に、一刷毛の水を塗るや否や、顔をしかめて引き下がった。もつともその引き下がる時に、自責に似た一種の心もちが、刹那に彼の心をかすめもしたが、彼のさきを感じていた嫌悪の情は、そう

いう道德感に顧慮すべく、あまり強烈だったものらしい。

其角に次いで羽根楊枝とり上げたのは、さつき木節が合図をした時から、すでに心の落着きを失っていたらしい去来である。日ごろから恭謙の名を得ていた彼は、一同に軽く会釈をして、芭蕉の枕もとへすりよつたが、そこに横たわっている老俳諧師の病みほうけた顔を眺めると、ある満足と悔恨との不思議に錯雜した心もちを、いやでも味わわなければならなかった。しかもその満足と悔恨とは、まるで陰と日向のように、離れられない因縁を背負つて、実はこの四五日以前から、絶えず小さな彼の気分を搔乱していたのである。というのは、師匠の重病だという知らせを聞くや否や、すぐに伏見から船に乗つて、深夜にもかまわず、この花屋の門を叩いて以来、彼は師匠の看病を一日も怠つたということはない。その上之道しどうに頼みこんで手伝いの周旋を引き受けさせるやら、住吉大明神へ人を立てて病氣本復を祈らせるやら、あるいはまた花屋仁左衛門に相談して調度類の買入れをして貰うやら、ほとんど彼一人が車輪になつて、万事万端の世話を焼いた。それはもちろん去来自身進んで事に当たつたので、だれに①恩を着せようという気も、皆無だったことは事実である。が、一身を挙げて師匠の介抱に没頭したという自覚は、勢い、彼の心の底に大きな満足の種を蒔いた。それがただ、意識せられざる満足として、彼の活動の背景に暖かい心もちをひろげていたうちは、もとより彼も行住坐臥に、なんらのこだわりを感じなかつたらしい。さもなければ夜伽の行燈の光の下で、支考と浮世話に耽ひつている際にも、ことさらに孝道の義を釈いて、自分が師匠に仕えるのは親に仕える心算などと、長々しい述懐はしなかつたであらう。しかしその時、得意な彼は、人の悪い支考の顔に、ちらりと閃いた苦笑を見ると、急に今までの心の調和に狂いの出来た事を意識した。そうしてその狂いの原因は、始めて気のついた自分の満足と、その満足に対する自己批評とに存していることを発見した。明日にもわからない大病の師匠を看護しながら、その容態をでも心配することか、いたずらに自分の骨折りぶりを満足の眼で眺めている。——これは確かに、彼のごとき正直者の身にとつて、自ずから疚しい心もちだったのに違いない。それ以来去来は何をするのにも、この満足と悔恨との矛盾から、自然とある程度の掣肘せいちゆうを感じ出した。まさに支考の眼のうちに、偶然でも微笑の顔が見える時は、かえつてその満足の自覚なるものが、一層明白に意識されて、その結果いよいよ自分の卑しさを情けなく思つたこともたびたびある。それが何日か続いた今日、こうして師匠の枕もとで、末期の水を供する段になると、道德的に潔癖な、しかも存外神

経の繊弱な彼が、こういう内心の矛盾の前に、全然落着きを失ったのは、気の毒ではあるが無理もない。だから去来は羽根楊枝をとり上げると、妙に体中が固くなつて、その水を含んだ白い先も、芭蕉の唇を撫でながら、しきりにふるえていたくらい、異常な興奮に襲われた。が、幸い、それとともに、彼の睫毛に溢れようとしていた、涙の珠もあつたので、彼を見ていた門弟たちは、恐らくあの辛辣な支考まで、全くこの興奮も彼の悲しみの結果だと解釈していたことであろう。

やがて去来がまた憲法小紋の肩をそば立てて、おずおずと席に復すると、羽根楊枝はその後ろにいた丈草の手へわたされた。日ごろから老実な彼が、つつましく伏眼になつて、何やらかすかに口の中で誦しながら、静かに師匠の唇を潤している姿は、恐らくだれの見た眼にも厳かだつたのに相違ない。が、この厳かな瞬間に突然座敷の片すみからは、不気味な笑い声が聞こえ出した。いや、少なくともその時は、聞こえ出したと思われたのである。それはまるで腹の底からこみ上げてくる哄笑が、喉と唇とに堰かれながら、しかもなお可笑しさに堪えかねて、ちぎれちぎれに鼻の孔から、迸ほとばしつて来るような声であつた。が、言うまでもなく、だれもこの場合、笑いを失したものがあつたわけではない。声は実にさつきから、涙にくれていた正秀の抑えに抑えていた慟哭が、この時胸を裂いて溢れたのである。その慟哭は勿論、悲愴を極めていたのに相違なかつた。あるいはそこにいた門弟の中には、

「Ⅱ」 という、師匠の名句を思い出したものも、少なくはなかつたことであろう。が、その凄絶なるべき慟哭にも、同じく涙に咽ぼうとしていた乙州は、その中にある一種の誇張に対して、——と言うのが穏やかでないならば、慟哭を抑制すべき意志力の欠乏に対して、多少不快を感じずにはいられなかつた。ただ、そういう不快の性質は、どこまでも知的なものに過ぎなかつたのであろう。彼の頭が否と言っているにもかかわらず、彼の心臓はたちまち正秀の哀慟の声に動かされて、いつか眼の中は涙で一ぱいになつた。が、彼が正秀の慟哭を不快に思い、ひいては彼自身の涙をも潔しとしないことは、さつきと少しも変りはない。しかも涙はますます眼に溢れて来る——乙州はついに両手を膝の上についたまま、思わず嗚咽の声を發してしまつた。が、この時歔歔ききするらしいけはいを洩らしたのは、独り乙州ばかりではない。芭蕉の床の裾の方に控えていた、何人かの弟子の中から、それとほとんど同時に湧をすすする声が、しめやかに冴えた座敷の空気をふるわせて、断続しながら聞こえ始めた。

その惻惻として悲しい声のうちに、菩提樹の念珠を手首にかけた丈草は、元のごとく静かに席へ返つて、あとには其角や去来と

向かい合っている。

（この後、支考、惟然坊が末期の水をとる。）

続いて乙州、正秀、之道、木節と、病床を囲んでいた門人たちは、順々に師匠の唇を潤した。が、その間に芭蕉の呼吸は、一息ごとに細くなって、数さえ次第に減じて行く。喉も、もう今では動かない。うす痘痕の浮かんでいる、どこか蠟のような小さい顔、はるかな空間を見据えている、光の褪せた瞳の色、そうして頤にのびている、銀のような白い鬚——それがみな人情の冷たさに凍てついて、やがて赴くべき寂光土を、じつと夢みているように思われる。するとこの時、去来の後ろの席に、黙然と頭を垂れていた丈草は、あの老実な禪客の丈草は、芭蕉の呼吸のかすかになるのに従って、限らない悲しみと、そうしてまた限らない安らかな心もちとが、おもむろに心の中へ流れ込んで来るのを感じ出した。悲しみはもとより説明を費やすまでもない。が、その安らかな心もちは、あたかも明け方の寒い光が次第に闇の中にひろがるような、不思議に朗らかな心もちである。しかもそれは刻々に、あらゆる雑念を溺らし去って、果ては涙そのもののさえも、毫も心を刺す痛みのない、清らかな悲しみに化してしまう。彼は師匠の魂が虚夢の生死を超越して、常住涅槃の宝土に還ったのを喜んででもいるのであろうか。いや、これは彼自身にも、肯定の出来ない理由であった。それならば——ああ、たれかいたずらに踏阻逡巡して、己れを欺くの愚をあえてしよう。丈草のこの安らかな心もちは、久しく芭蕉の人格的圧力の桎梏に、空しく屈していた彼の自由な精神が、その本来の力をもって、ようやく手足を伸ばそうとする、解放の喜びだったのである。彼はこの恍惚たる悲しい喜びの中に、菩提樹の念珠をつまぐりながら、周囲にすすりなく門弟たちも、眼底を払って去ったごとく、唇頭にかすかな笑みを浮かべて、恭しく臨終の芭蕉に礼拝した。

こうして、古今に倫を絶した俳諧の大宗匠、芭蕉庵松尾桃青は、「悲嘆かぎりなき」門弟たちに囲まれたまま、溘然として属續に終わったのである。

問8

傍線部(ア)と(カ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

14

から

18

(ア) 閃いた

14

① 就職のシュウセン
③ 犯罪のセンギ

② 癌のセンコク
④ 雷のセンコウ

(イ) 醜き

15

① 金銭へのシュウチャク
③ 夏のシュウウ

② シュウトウな計画
④ シュウタイをさらけ出す

(ウ) 耽つて

16

① タンサイの絵
③ 状況をガイタンする

② 酒色にタンデキする
④ ゴウタンな人柄

(エ) 潤して

17

① シツジュンな風土
③ 主君にジュンシする

② 規則をジュンシュする
④ 市内をジュンカンするバス

(オ) 褪せた

18

① 納税のエンタイ
③ 染物のタイシヨク

② 選手のコウタイ
④ タイダな性格

問9

二重傍線部①～④の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

19

21

① 堅い信念が根を張っていた

19

- ① どんな人でも死に臨んでは、極樂往生を願ひ、仏の救いを求めるはずだとの確固たる思い
- ② 誰であろうとも仏を信じなければ、極樂往生はできないというゆらぐことのない思い
- ③ 仏さまの称名を一心に唱えさえすれば、どんな人でも救われるという強固な思い
- ④ 山村暮らしの純朴なものにとつて、仏にすがりさえすれば、必ず極樂往生できるとの思い

② 恩を着せようという気

20

- ① 師匠への感謝の気持ちは、居合わせている人たちの誰にも劣らないと自負する気持ち
- ② 師匠の自分に対する信頼に応じて、相応に尽くすのが妥当であるという気持ち
- ③ 師匠への恩返しは、居合わせている人それぞれの判断でできることをすべきだという気持ち
- ④ 師匠のために自分がしたことを居合わせている人たちに有難く思われようという気持ち

③ 古今に倫を絶した俳諧の大宗匠

21

- ① 昔から今に至るまで、風流人の中でも抜きん出た師匠
- ② 昔から今に至るまで、俳人の中でも傑出した師匠
- ③ 昔から今に至るまで、人格、学識に卓越した師匠
- ④ 昔から今に至るまで、詩歌の世界で名だたる師匠

問10

本文中の空欄

I

II

には芭蕉の句が入る。その組み合わせとして最も適当なものを、次の中から

一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

22

①

I

∴

この道や行く人なしに秋の暮

II

∴

秋深し隣は何をする人ぞ

②

I

∴

死にもせぬ旅寝の果てよ秋の暮

II

∴

野ざらしを心に風のしむ身かな

③

I

∴

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

II

∴

塚も動けわが泣く声は秋の風

④

I

∴

旅寝して見しや浮世の煤払ひ

II

∴

憂きわれを寂しがらせよ秋の寺

問11 傍線部(1)「流石にぎよつとせずにはいられなかったのであろう」とあるが、この時の其角の心境の説明として最も適当なもの

のを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

23

① 師匠の死に臨んだ其角は、木節の眼の中に、いよいよという緊張感のはざまにやつときたとの安心感が掠めているのを認め、自分自身の心の中にも同様の思いが萌しているのに気づいて動揺している心境

② 師匠の死に臨んだ其角は、医師である木節の様子に、これまで十分なことができたのかとの不安や師匠をできるだけ早くこの状態から解放させてあげたいとの願望があるのに気づいて啞然としている心境

③ 師匠の死に臨んだ其角は、弟子たちの深い悲しみの中に、師匠を少しでも早くこの苦しみから解放させたいという師匠の死を願う気持ちが隠されているのに気づき愕然としている心境

④ 師匠の死に臨んだ其角は、弟子たちがいよいよという緊張感に包まれて見守っている中で、自分だけが師匠の死を不気味で醜悪なものと思嫌っているのに気づき凝然と立ちすくむ心境

問12

傍線部②「だから去来は羽根楊枝をとり上げると、妙に体中が固くなつて、その水を含んだ白い先も、芭蕉の唇を撫でながら、しきりにふるえていたくらい、異常な興奮に襲われた」とあるが、この部分の去来的心境の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

24

① 他の誰よりも師匠の介抱を為し得たという自得の念と、師匠の世話にかまけて師匠の容態と真摯に向き合えていなかったという後悔の念との間で心の調和を失っている。

② 一心に師匠を介抱したという自足の念と、師匠の容態を心配もせずに自分の行為を満足の眼で見ているという悔恨との間で心の調和を失っている。

③ 親に尽くすつもりで師匠の世話をしてきたという充足感と、実の親ほどの悲しみを感じ得ない自分の心の在り様への自責の念との間で心の調和を失っている。

④ 師匠のために自分の出来ることを為すべきであるという忠義心と、心の思いを実行に移すことのできない自分の精神的な弱さを反省する思いとの間で心の調和を失っている。

問13

傍線部(3)「彼はこの恍惚たる悲しい喜びの中に、菩提樹の念珠をつまぐりながら、周囲にすすりなく門弟たちも、眼底を払って去ったごとく、唇頭にかすかな笑みを浮かべて、恭しく臨終の芭蕉に礼拝した」とあるが、この部分の文章の説明として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

25

① 師の死に臨み、深い悲しみの中でも、師が生涯をかけて俳諧に精魂を傾けてきた労苦から解放されるのを心から労ると同時に、これまでの業績に対し心から敬意を払っている。

② 師の死に臨み、深く悲しみながらも、師の人間的威厳に圧倒され、委縮していた自分の精神がその束縛から解放されて自由に飛び立ち、本来の自分である無上の喜びに浸っている。

③ 師の死に臨み、深く悲しみながらも、師の死を契機に、これまでの束縛から解放されて、何はばかりことなく自由に振舞えるようになることが嬉しく、心から師に感謝の思いを抱いている。

④ 師の死に臨み、深い悲しみの中でも、師の偉大さに導かれて、俳人として大きく成長し得た喜びを痛感して、これから自立する覚悟と共に師に対する深い尊崇の念を抱いている。

問14

この小説の表現と内容の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

解答番号は

26

① 小説の場面、人物を、一人の弟子の視点から距離を置いて写生的に描写することによって、主観を排除してあるがままの姿が淡々と写真されている。偉大な師の死に際しても心を共有できない弟子たちの在り様を通して結局は孤独でしかない人間の真実の姿が克明に暴き出されている。

② 小説の場面、人物を、死にいく芭蕉の視点で、一切の虚飾を排除して、ただあるがままの姿が刻み出されている。師匠である自分の死に臨む弟子たちの自分勝手な心の動きが冷ややかに見つめられ、外見と内面とが相反する人間の利己的な在り様が痛烈に皮肉られている。

③ 小説の場面、人物を、第三者の視点から客観的に描写することによって、人物一人一人の内面が克明に抉り出されている。一見厳粛で悲嘆限りなく見える芭蕉の臨終に於ける弟子たちそれぞれの心の在り様は、師の死に臨んでも率直であり得ない人間の利己的な一面があぶり出されており、人間の真実の姿が浮き彫りになっている。

④ 小説の場面、人物を、芭蕉を見る医師の視点で、周囲や弟子たちの在り様が客観的に描かれている。師匠の末期に際し弟子たちがどのように振舞うか、その動作、内面に容赦のなく介入して、畏敬すべき宗匠の死に対してさえも己を無にしておき合うことのできない人間のやるせ無い一面を強く批判している。

